

第二回シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」

地域資料としての『近代建築』

日時 二〇〇七年三月一八日(日) 一四:〇〇～一五:五〇

会場 文京区男女平等センター

趣旨説明	森まゆみ	3
開会挨拶	宮前一雄	4
報告① 地域博物館と近代建築	川口明代	5
文京ふるさと歴史館の場合――		
報告② 近代建築と地域博物館の展示	北田建二	11
平成一八年度文京ふるさと歴史館企画展を例として――		
質疑応答	森(司会) 十川口 十北田	17
江戸東京フォーラム話題一覧他		23

趣旨説明

谷根千工房主宰
森まゆみ

私は二三年間、文京区と台東区の狭間で、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（通称『谷根千』）を発行しています。雑誌をつくり始めたころ、住宅総合研究財団のバックアップで、このフォーラムの前身である研究会が始まりました。江戸東京博物館の前館長である小木新造先生を中心に、江戸と東京をつなぐ視点をもった研究者の方々のお話を聞きました。それからかなりの回数を重ねまして、このように一般の方々にもご参加いただける会に発展したというわけです。今後の展開としては、実際にまちに出て、現場を見るという企画を考えています。

このシリーズフォーラムでは、「東京の地域学を掘り起こす」というテーマのもとに、地域博物館・資料館の活動も取り上げ

ていきます。

東京にも、市や区が運営する博物館・郷土資料館がありますが、横の連携がなかなか取れていないせいか、そこで働く優秀な学芸員の方々の活動は、あまり知られていません。そこでは非、彼らの活動に生で触れて、いろいろと教えてもらいながら、横のネットワークをつくっていかうと考える、ここ一年ぐらい活動しています。

今回のフォーラムでは、ここ文京ふるさと歴史館の学芸員でもあり歴史専門員でもあるお二人に話を伺います。ふるさと歴史館では、いつも大変ユニークな展覧会が開催されていますが、今回は「近代建築街角の造形デザイン」という特別展を開催しています。

まず一人目の川口明代さんには「地域博物館と近代建築―文京ふるさと歴史館の場合一」というタイトルで、続いて専門員の北田建二さんには「近代建築と地域博物館の展示―平成一八年度文京ふるさと歴史館企画展を例として―」というタイトルでお話いただく予定です。その後の質疑応答で

は、私が取りまとめ質問をお二人にしていきたいと思います。

本日は、今回取り上げられている湯島聖堂、お茶の水の昌平橋、山田守の聖橋などをご覧いただきましたが、この本郷には、まだまだたくさんのお見聞のべきものがございます。国の有形文化財に登録されている『伊勢屋質店』は、樋口一葉の日記に六回も出てきます。『本郷館アパート』や『求道会館』（東京都指定有形文化財）、『鳳明館』（登録有形文化財）という宿屋もあります。地図を入れてありますので、後では是非ご覧ください。

最後になりましたが、住宅総合研究財団が、私たちの江戸東京研究に対してバックアップしてくださることに大変感謝いたします。

もり・まゆみ

一九五四年東京都文京区生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業、東京大学新聞研究所修了。地域雑誌『谷中・根津・千駄木』編集人。著書に『円朝さんまい』『断髪のモダンガール』ほか。

開会挨拶

文京ふるさと歴史館館長〔開催時〕

宮前一雄

皆さまこんにちは。文京ふるさと歴史館館長の宮前でございます。私はあまりいい読者ではないのですが、森先生の著書は何冊か読ませていただいています。

森先生の文章からは、人と人との交流はもちろん、季節感というものが非常によく汲み取れます。まちの風景というものを非常にきれいに切り取っておられる。優れた作品であればあるほど、そのなかには、当時の社会やまち、人というものが描かれているのではないのでしょうか。そういう意味で、文学作品を読む楽しみの一つには、風景を読むということがあるのではないかと思います。

ふるさと歴史館の主な役割は、文京区の歴史、文化、あるいは人々の暮らしに関する資料を、後の世に残していくことです。では、その資料というのは何なのでしょう。大きく言えば、文京区そのものが資料

であるのではないかと思っています。

まちの変化を見続けて、まちの記憶、人々の記憶を、いかに資料として後世に残していくか。そういう大きな役割を、ふるさと歴史館は担っています。

現在、企画展「文京・まち再発見2―近代建築 街角の造形デザイン―」を開催しております。個別の建物を見ることも重要ですが、「街角」の重要性を私は感じています。街角、街並みの中に建物がある、そういう気持ちで展示をご覧いただければと思います。本館の学芸員が二名、企画展についての詳しいお話をしたいと思いますので、是非最後までお聞きください。

最後になりましたが、本日、このような会を催していただきました住宅総合研究財団、江戸東京フォーラム委員会の先生方、事務局の方々並びに本日進行役をしていただいている森まゆみ先生に感謝を申し上げます。簡単ではございますが挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

みやまえ・かずお

一九四六年東京生まれ。二〇〇二〜二〇〇七年文京ふるさと歴史館館長。現、文京区観光協会事務局長。



地域博物館と近代建築

— 文京ふるさと歴史館の場合 —

文京ふるさと歴史館学芸員

川口明代



— 文京ふるさと歴史館とは —

文京ふるさと歴史館は平成三年にオープンした地域博物館です。設立時は文京区教育委員会の所管でしたが、今年度から役所内の組織変更等があり、現在は区民部アカデミー推進課の所属になっています。専門職員は常勤が三人、非常勤が二人、ほかに館長と事務職員二人、全部で八人で運営しています。これまでふるさと歴史館では、文京区の歴史、民俗、文化に関わる、あらゆるものを対象として博物館活動を展開してまいりました。今年で一七年目になります。

今回テーマとなる近代建築についても、ほかの歴史資料である古文書、区民の方からいただいた民具、生活資料などと同等に資料収集し、調査し、展示をするよう力を注いできました。東京二三区内には私どもの博物館と同じような地域博物館が各区にあります。こういった博物館、文化財を担当する所管の部署でも、いろいろ建築を調査したり、報告書を出したりといった立派な仕事がたくさんあります。

世田谷区には次大夫堀公園民家園と岡本公園民家園という、移築民家を展示する野外博物館が二カ所あります。前回のフォーラムで取り上げた荒川ふるさと文化館では、常設展示室に昭和三〇年代の街並みを再現しています。渋谷区には白根記念渋谷区郷土博物館・文学館がありますが、この常設展示では同潤会アパートを取り上げています。このように地域博物館でも近代建築に関わる活動をしている所もあります。

渋谷では今年の秋に近代建築の企画展をする聞いていますが、当館では近代建築を重要な地域資料の一つと捉え、継続的に調査、資料収集、企画展の開催に取り組ん

できました。これは二三区レベルでは珍しいことだと思います。結果として、こういう活動の積み重ねが、私たちのふるさと歴史館の一つの特徴になりつつあるように思います。

— 近代建築との出会い —

私がこの文京ふるさと歴史館の学芸員になったのは平成七年ですが、じつはそれまで文京区とはほとんど関わりがなく、文京区について何も知らない状況で専門職として採用されました。しかしそれではまったく仕事になりませんから、とにかく勉強したわけです。もちろん文献も読みましたが、その時にやったのが「まちあるき」です。足で文化財を訪ねたり史跡を訪ねたりすると、土地勘も得られ、これは非常に貴重な経験でした。いま「まちあるき」はブームになっていますが、当時はそれほどやっている人がいなかった時代です。その時の経験が今も役に立っています。

すでになくなってしまった景色がずいぶんありますが、江戸時代の切絵図とまったく同じ道筋が残っていたり、この大きな緑は何かなと思うと武家屋敷の跡だったり、

文京区は本当に歴史が身近にあるまちだということがわかりました。

そのなかでも、特に気になったのは古い建物でした。洒落たデザインの洋館があったり、大切に住み続けられている様子が見られたり、廃墟のような建物やタイムスリップしたような商店がたくさんあって、これは一体何なのかなと思ったのが最初でした。

私は建築が専門ではありませんので、当時は「近代建築」という言葉すら知りませんでした。しかし幸運にも文京区民大学で近代建築の講座があり、志村直愛さんの講義を聴くことができました。志村さんは、現在東北芸術工科大学の准教授で、当時は芸大の助手でした。講義を聴いてまちを歩くなかで、これらが近代建築だということを知ったわけです。

これらの建築は、建築学や建築史上重要だということはもちろんですが、それに加えてまちの景観をつくる最も重要な要素です。このなかでいろいろなドラマが展開されたことでしょう。近代建築を知ることが歴史を知るうえで重要なポイントになると実感したことが、私のその後の博物館活

動の原点になっています。

―《旧安田楠雄邸》の保存活動―

近代建築を取り上げるもう一つのきっかけは、《旧安田楠雄邸》の保存に関わったことです。安田邸は大正七年に現在の千駄木三丁目に建てられました。建て主は豊島園をつくった藤田好三郎で、大変大規模な近代和風建築です。いつも門扉が開かれていて、大きな椎の木がある玄関先が見える地域のシンボルだったのですが、平成七年、ちょうど私が文京区に入った年に存続の危機が訪れました。そのときに、森まゆみさんのいらっしゃる谷根千工房、谷中学校、地元の建築家、地域に住む方など、この建物を大切に思う有志が集まり、何とかしたいということで、所有者の許可を取って調査したり、お掃除をしたり、報告書を出したりしました。それをきっかけにできたのが「文京歴史的建物の活用を考える会」、通称「たてもの応援団」です。

この建物を残したいという安田さんの強い思いを実現させようと、たてもの応援団では、日本ナショナルトラストへの寄贈を橋渡ししました。所有者と市民と受け入れ

側、三者の思いが噛み合って保存できた建物なのです。

いまもナショナルトラストの会員の方やたてもの応援団の方、そのほか地域の方々が関わって、ひな祭りを行うなど、活動を続けています。四月からは定期的に公開されることになる予定です。

皆で力を合わせ、実際に建物が保存されていく様を見ることは、地域博物館の学芸員としてこれから何ができるかを考えるきっかけになりました。そして、このとき得た人間関係も、その後の私の財産になっています。

―近代建築に関する調査―

博物館の機能は、一般的に収集・保管、調査・研究、展示・普及という、三つのタームで表わされます。これが相互に重なり合って一つの博物館の活動となるのです。この三つの機能を通して、ふるさと歴史館で近代建築にどう関わってきたのかということ、ここから具体的に紹介したいと思います。

まず調査研究についてです。これまでふるさと歴史館では個別の建物について一七

〈個別調査〉

調査年度	名称	地域	備考	資料収集	特別展・企画展での展示
1 平成7年度	清和寮	本郷	解体	○	平成10年度特別展
2 平成8年度	本郷閣(旧十河信二邸)	本郷	解体	○	平成10年度特別展
3 平成8年度	旧中江邸	本郷	解体		平成10年度特別展
4 平成9年度	楠亭(旧駒沢邸)	本郷	解体	○	平成10年度特別展
5 平成10年度	旧東京市真砂町市営住宅	本郷	現存 模型制作のための実測		平成10年度特別展
6 平成10年度	旧東方文化学院東京研究所	大塚	現存		
7 平成10年度	中島(弥団次)邸	弥生	解体		
8 平成11年度	山下邸長屋門	音羽	現存		
9 平成11年度	児玉希望邸	千駄木	解体		
10 平成12年度	旧遠藤医院	小石川	解体	○	平成18年度企画展
11 平成12年度	旧伊勢屋質店	本郷	現存	○	平成10年度特別展
12 平成13年度	窪町小学校	大塚	解体		平成14年度企画展
13 平成14年度	旧亀井邸	千石	解体		
14 平成15年度	新江戸川公園松声閣	目白台	現存		
15 平成16年度	求道学舎・求道会館	本郷	現存(改修) 映像記録のみ	○	平成17年度特別展
16 平成17年度	萬葉蔵(旧佐佐木信綱邸)	西片	解体	○	平成18年度企画展
17 平成18年度	講談社第一別館(旧三井高陽邸)	目白台	解体	○	平成18年度企画展

〈総合調査〉

A 平成7年度	近代建築物概要調査	区内全域	『総覧』他掲載物件の確認		
B 平成10年度	歴史的建造物(近代)首悉調査	区内全域	目視による調査		平成10年度特別展

表1 文京ふるさと歴史館における建造物(近代)調査・資料収集・展示実績

年度	会期	種別	タイトル
平成10年度	平成10年10月24～12月6日	特別展	文京・まち再発見 ―近代建築からのアプローチ―
平成14年度	平成15年1月25日～3月9日	企画展	移りゆくまちの風景 ―関東大震災後の文京―
平成17年度	平成17年10月22日～12月4日	特別展	近代建築の好奇心 ―武田五一の軌跡―
平成18年度	平成19年2月10日～3月18日	企画展	文京・まち再発見2 ―近代建築 街角の造形デザイン―

表2 「近代建築」に関する特別展・企画展開催実績

件の調査を行ってきました「裏」。緊急性の高いものを優先して調査した結果ではありますが、ほとんどが解体されています。調査の方法としては、実測をして図面を作り、写真を撮って映像記録をとり、所有者や関係者から聞き取り調査をし、歴史調査をします。実物を残すのが一番よいのですが、どうしてもそれがかなわない場合、記録を残すことが重要になります。また、建物本体だけでなく、そこで営まれた生活や歴史についても、併せて記録し伝えていきたいと努力しています。

●《本郷閣》(旧十河信二邸)

では、具体的にいくつか事例を挙げて調査についてお話ししましょう。一つは本郷閣(旧十河信二邸)です。本郷二丁目に昭和一二年に建てられた建物ですが、平成八年に解体されました。そのとき調査に入ったのですが、棟札が見つかるなど大発見がありました。立派な玄関ホールで、その左側に応接室があり、二階には広くて立派な書院付きの和室もありました。

こうした調査研究にいつも尽力してくれるのが、「伝統技法研究会」です。この

伊郷吉信さんは、文京区の文化財調査員もしておられ、私たちの活動にはなくてはならない方です。また、いつも多くの方がボランティア的に調査に参加してくださいませ。こうした皆さんの技術と能力によって、私たちの調査研究は支えられています。記録が残るだけでなく、参加してくださった方々の記憶のなかにも、建物が残っていくのです。

また、『本郷閣』が壊されるときに、ステンドグラス、マントルピースなどを取り外し、まず平成一〇年の特別展で公開しました。その後、多くの人々に見ていただけのように、文京区の施設、特別養護老人ホーム千駄木の郷を建設した時、そのなかにこれらを再生することができました。このラウンジはどなたでも利用できる場所で、安田邸の二軒隣です。ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

●歴史的建造物(近代)皆悉調査

個別調査以外に総合的な調査を行ったのが、「歴史的建造物(近代)皆悉調査」です。これに先立つ平成七年、文京区にある近代建築の調査を行いました。この時は昭和

六〇年に刊行された『日本近代建築総覧』に掲載されているリストをもとに一九五件をピックアップしたのですが、調査の結果、そのうちの五割、一〇二件が壊されていました。壊滅的な状況ではありませんが、リスト以外にも古い建物がたくさん残っていることがわかり、それを受けて平成一〇年に歴史的建造物の皆悉調査を行いました。

文京区にある一九町を、町名別にローラー的に歩いて目視で見えいき、調査カードを作りました。その結果、一、六八六件の近代建築が確認できました。また、地域的な特徴も併せてわかってきました。

ただ、これだけあることがわかっていても、解体される建物は後を絶ちません。将来的には、総合的な追跡調査や個別の建物調査の必要性もあると感じています。

――近代建築に関する資料収集――

ふるさと歴史館では、調査にともない資料収集も行っています。具体的にはステンドグラス、マントルピース、瓦、タイルなど、ほとんど捨てられるようなものまで併せて集めています。解体される建物から取

り外して集めることが多いです。

博物館では、「モノ」だけでは資料になりません。それに「コト」が加わります。歴史的な背景やモノの背景にある事実を加えることで一つの資料になるのです。これは歴史的な資料についてもそうですし、民具や生活用具に関しても同じことが言えます。こういう活動をしていると、寄贈したいといった申し出もたくさんあり、結果、多くの資料を収集することができました。

●《曙ハウス》

そのなかで特に紹介したいのが、『曙ハウス』です。《曙ハウス》は去年二〇〇六年の今ごろ解体されてしまいました。根津の不忍通りより一本裏の通りにあった木造アパートで、私も根津のシンボルだと思っていた建物です。残念ながら歴史館では調査に入ることができなかったのですが、インターネットのブログを使って情報交換をし、写真を撮ったり記録を取ったり発表したりしている方がおられました。この建物自体に、人の心に訴えかけるものがあつたのでしよう。いろいろな方面からそれに反応があり、その方々の熱意と尽力で、私ど

もの博物館に、この《曙ハウス》のプレートと親柱と、室内にあった表示板を収蔵することができました。

そのご縁で今回の企画展でも、masaさん、neonさん、m-louisさんに協力いただき、問取図をつくっていただきました。是非、あとでご覧になってください。この経緯については、m-louisさんのブログにリンク集がありますので、そちらのほうも是非ご覧になってみてください★。きっと熱い思いが伝わってくると思います。

★ URL = <https://yanka.m-louis.org/2006/01/30/13124.php>

―― 展示室はイントロダクション ――

私たちはこれまで、このような調査を展示というかたちで皆さんにお示ししてきました²。そのうち私の関わった二本について紹介します。

一つは「文京・まち再発見」です。この展覧会は平成一〇年に行いました。建築を展示するときの最大の問題は、実物は展示室に入らないということです。移築して野外博物館をつくることは可能ですが、展示室内に入れることは絶対無理です。従って

関連資料を展示することになるのですが、このときのコンセプトは、展示室はイントロダクション(導入)だということ。つまり、まち全体が博物館だということです。

それを検証するために事業として、九コースのまち探訪を行いました。そのときもたても応援団や谷根千工房の方、地域に住んでいる方にまちの案内役をしてもらいました。また、当日参加できなかった方のためにマップも作りました。歴史館を出ても展示室は終わりではありません。ここからが始まりです。歴史館から最寄り駅まで四つのコースをつくり、マップに載せました。帰り道も展示室の一部になるのです。

これは、あくまでも歴史館のある本郷を一つの例として提示したのですが、企画展に訪れた方々が、自分のまちの魅力を再発見するきっかけになればと願っています。

―― 市民参画の展覧会 ――

もう一つ、「近代建築の好奇心―武田五一の軌跡―」展を紹介しましょう。武田五一は関西中心に活躍した建築家でしたが、東京帝国大学卒業で、本郷には都指定

文化財になっている《求道会館》があったり、西片に住んでいたこともあったりと、文京区に非常に関わりの深い人物です。この人の業績を地域ゆかりの人物として再評価したというのが、この展覧会でした。非常にマルチ人間で、インタビュー、図面、絵のほかにも、ご遺族の方にも協力していただき新しい資料もたくさん展示することができました。

また、これは何より市民参画でやった初めての展覧会です。それまで私どもでは、こういった試みをしたことがなかったのです。

この展覧会のきっかけは、近代建築を愛好し、まちあるきが好きな方の集まり「建築から学ぶ会」からの誘いでした。それなら是非、皆さんも協力してくださいということでワーキンググループを立ち上げ、ほかにも歴史館友の会やたても応援団、建築の専門の方々にも加わっていただき、企画の準備から実施まで、特別展などを行うときに学芸員がやる仕事全般に関わっていただきました。ただ、無理強いはいしないで、平日に動ける方、休みに動ける方等いろいろいらっしゃるし、得意分野を活

かした形で参加してもらいました。

メンバーは一四人いて、もちろん専門家の方もいましたが、学園祭のようなノリで楽しく準備をしました。結果、学芸員だけで行うよりも、もつともつと大きな成果が得られました。

具体的には、武田五一の作品データベースを作りました。武田五一の作品は、南九州から北は北陸までとてもたくさん残っています。それらすべてを館で調査し、報告するというのは無理なのですが、皆さんは全国を飛び歩いていますから、そういった知識や情報は豊富です。また、プログラムなどもやっていますから、こうしたデータベースなどはお手の物なのです。ほぼ全件、写真入りで紹介できたというのは大きな成果の一つだったと思います。

もちろん、市民参画ということで人間関係が難しかったり、学芸員だけでやったほ

うが楽な部分もありましたが、何よりも皆が自分の力を発揮する場が得られ、私たちはそれを活かし、そういう喜びを共有できたことが非常に大きな成果でした。

最後になりますが、ふるさと歴史館が近代建築の調査、資料収集、展示などを行えたのは、いろいろな人の協力があったからです。それは近代建築に限らず、私たちの地域博物館のあり方そのものに関わることもあると思います。こういうまちの歴史を記憶したり記録したり継承して後世に伝えるという活動は、地域博物館の重要な役割であり、継続していくことで一定の評価や成果が得られるのではと自負もしています。

ただ、博物館というのは狭いスペースです、あくまでもそれは導入であって、博物館の外、まち全体が大事なのだということ伝えていくことが、私たち学芸員の

役割ではないかと思えます。ただ、私たちのように小規模な博物館で、どれだけの力が持てるかという心もとない部分もあります。実際、建物そのものの保存ということにはまったく力が及んでいないというのが現状です。

いろいろな制約があるなかで、これから私たちがどこまで出来るかというのは、私たち自身の努力もあるとは思いますが、地域の情報をいろいろ集めてそれを発信し、そこでまた人と人とが交わっていく、そういう場としてふるさと歴史館をもつと活用していただき、区民の方々と一緒に私たちもその機能を充実させていければと思っています。

かわぐち・あきよ

一九六六年千葉生まれ。一九八九年東京学芸大学教育学部卒業。麻布美術工芸館、国立歴史民俗博物館(非常勤)を経て、一九九五年より現職。

近代建築と地域博物館の展示

—平成一八年度文京ふるさと歴史館企画展を

例として—

文京ふるさと歴史館専門員「開催時」

北田建二



今回の企画展、「文京・まち再発見2—近代建築 街角の造形デザイン—」についてお話をさせていただきます。

この展覧会は、予算的には非常に規模の小さな展覧会でしたが、お金のない分、学芸員の私と川口さんのやる気、思い入れが強く反映されたものになったと思います。今回展覧会で取り上げた一五事例のなかから、いくつかエピソードとしてお話をさせていただき、地域博物館で近代建築をどう展示していくかについての課題や問題点をお話させていただければと思います。

—近代建築をどう展示するか—

これまで当館ではいくつかの建築展を行ってきました。平成一〇年度の「文京・まち再発見」では、現存する建物、あるいは解体された建物などを対比させながら、近代建築を取り巻く実態を明確にしています。地域環境とその景観、建築を関連させながら、その地域の特性を明らかにしていく展示も行いました。

平成一四年度の「関東大震災後の文京」、平成一七年度の「武田五一の軌跡」では、建築家や都市計画といったテーマと関連して、建築を重要な展示要素として取り上げました。

それに対して今回の展覧会は、明治時代から戦後までの伝統建築から戦後モダンズム建築まで、近代建築の歴史を概観しながら、文京区の建造物を幅広く紹介しました。ですから建造物としてはばらばらで、テーマ性を強く打ち出すというより、まずは文京区にある近代建築に関する情報、収蔵資料を紹介しました。

先ほど川口さんのお話にもありました。が、建造物そのものを展示室に持って来る

ことはできません。ほかの美術館での展覧会などを見ても、パネルや模型が中心になっています。しかし、実物にこだわりたという思いが学芸員にはあります。入手した情報や資料は調査研究を通して消化し、博物館の外に出して公開していくというのが正常なあり方だと考え、そういった展覧会を目指しました。

—収蔵資料を活用する—

館の収蔵資料の活用を試みて調査に取りかかったのが《蕉雨館》(旧阿部正桓邸)です。これは旧福山藩藩主の阿部家の中屋敷跡地に建てられた建物です。当館には施工者とされる飯田秀次郎、杉田伊之助という二人の人物に関する資料があり、これを展示するために調査を始めました。

ただ、施工者の後ろに「伝」と付いているので、阿部家の建物の建設に携わったと伝えられている、というレベルのことしかわかっていませんでした。そこで、杉田伊之助に関する文書群が当館に寄贈されましたから、それらを丁寧に調査し、読み解いてみました。

杉田伊之助という人物は、江戸時代越前

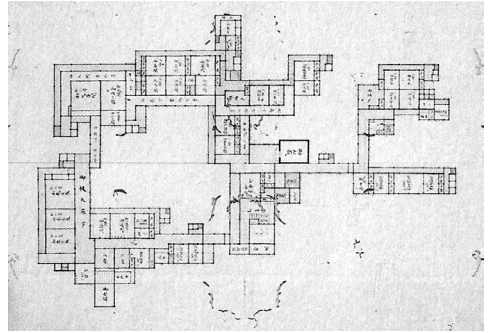


図1 《蕉雨館》(旧阿部正桓邸)間取図(杉田家文書)
所蔵：文京ふるさと歴史館

の出身で松平家の抱えの木工であったという伝聞です。平成八年に寄贈された杉田家の文書を調査してみたところ、明治二十三年四月八日の日付で、家屋の建築に当たって杉田伊之助を月給一五円で雇うと書かれた、阿部家から出された文書が発見されたのです。年代的にみても、阿部家の建設に杉田伊之助が雇われていたことは間違いないとわかりました。

続いて杉田家文書のなかから阿部家の間取りを示す資料が見つかりました「図」。近世の武家屋敷を踏襲した形をしています。阿部家に残されている資料と突き合わせる

ことで、判明しました。これによって、杉田伊之助と阿部家との関わりがよりはっきりしてきたわけです。

このほか、阿部家の板図も展示しています。大工は建物を建てる際に、板に間取りを書いて、記録のために建物に残しておくんです。展示品も現場で引かれた板図の類いだと思いますが、とにかく非常に大きなもので、どういう経緯かわかりませんが、杉田伊之助の家に長らく保管されていました。

阿部家は明治維新後、中屋敷の跡地に殖産興業で養蚕を始めます。しばらく続けますがあまりうまくいかなかったようで、明治二〇年代に養蚕経営から住宅地経営に転換します。そのベースとしてこの建物がつくられました。やがて、学者町の西片と呼ばれるような近代日本の郊外住宅地が形成されます。地域形成を考えるうえで、まさに原点と言えるような資料がここに隠されているということです。

このことは、今回の展覧会に合わせて調査し、初めて明らかになりました。収蔵資料を再調査してみると、実はまだまだこういった重要な事例が隠されているのかもしれない。

れません。

— 展覧会が資料を呼ぶ!?

展覧会を企画すると、こちらが意図していかないにもかかわらず、いい資料が見つかったり、寄贈されることがあります。先ほどご紹介した《曙ハウス》の看板などがそうですし、東洋学園大学(旧東洋女子短期大学)のフェニックス・モザイクについても、そういったことがあてはまります。

フェニックス・モザイクは建築に飾られたモザイク画です。この図案や制作を手がけたのは、近代日本を代表する建築家の今井兼次です。しかしこの事実は意外と知られていません。どうか今回の展覧会で紹介できないかと思っていたのです。

今回の展示は実物を重視したということもあって、資料がなければ展示できないと思っていたのですが、たまたま東洋学園大学の方と話すことがあり、話がうまい具合に進みました。

さらに展示をするにあたり、ご子息の今井兼介さんに連絡してみたところ、フェニックス・モザイクや今井兼次に関する資料群が、現在、多摩美術大学に寄託されて

おり、それらのなかには、アイデアを練っている段階のスケッチがたくさん残っていることを教えてもらいました。さらに、多摩美術大学美術館からはもし展示するなら額装して展示しやすいようにしてもいいとお申し出をいただきました。そのおかげで、このような形で展示ができました。現在は西側の壁面のモザイクだけが残っているのですが、とても迫力のある作品ですので、是非実物をご覧いただきたいと思えます。

このモザイクの年代は、昭和三六年と昭和三九年なので比較的新しい作品です。しかし、どういう主題でつくられたものか、どういうイメージなのがまったくわからない。そういったものが失われている状態でした。当然、阿部家のときと違って私たちには情報が全然なかったわけですから、一から調べることになりました。

まず東洋学園大学の協力を得て調べてみると、大学の在校生や同窓生が持ち寄った陶器の破片を材料に用いられたことがわかりました。今井兼次は以前の作品《大多喜町役場》で農家の倉庫にあった火鉢の破片を用いています。価値を失った陶器の破

片を今井は「生命なき陶片」と呼んでいますが、これが多く集まることで力強い生命を持った芸術作品として甦り、永遠の存在となる。まさにフェニックスのイメージです。その経験からモザイクを制作し、「フェニックス・モザイク」と呼称されるようになったということです。

そしてさらに、昭和三七年長崎市に建てられた傑作、《日本二十六聖人殉教記念館》につながるのです。二つの塔にモザイクが廻らされた非常に美しい作品です。

つまり、東洋学園大学のモザイクは、大多喜町役場から日本二十六聖人殉教記念館へと二つの代表作をつなぐものとして、今井兼次の建築作品の流れを考える意味でも、非常に重要なものであるということがわかってきました。

東洋学園大学の建物自体は藤田組の設計で、今井自身の作品ではないので、どうしても注目度は低いわけですが、地域の中にあつて非常にインパクトがあり、シンボルになるような作品です。そういった意味で、もう一度きちんと調査して調べなければならぬと考え、更に調査を進めてみました。

モザイクの場所ですが、南西方向の壁面に大きなモザイクがあり、続いて屋上のペントハウスの北側の壁面にもあります。さらにこの階段から上に登って天井に至るまでモザイクがあります。もう一つペントハウスの南側、先ほどの裏側にモザイクがあります。これらが昭和三六年の第一期建設工事に合わせて制作されたことが資料から判明してきました。続いて昭和三九年の第三期工事で、昇降口の斜め上の壱岐坂通りに面した部分に、一つ作品がつくられています。このように、合わせて五作品あるということが判明しました。このことは、大学の方々は知っているわけですが、元女子大だったために、私のような男が足を踏み入れることはできませんでしたので、今回初めてわかった次第なのです。

展示するに当たり、作品のタイトル、主題を明らかにしたいと思い、『旅路』という今井兼次の作品集を見ました。ここには五つの主題があると書かれています。①岩間がくれの蓮花、②永遠の友情、③思いの四季、④芽生えから開花、⑤繁栄の樹です。しかし、どれがどれかという紹介

の仕方はしていません。そこで、『新校舎竣工記念』というパンフレットを見てみました。これは昭和三九年、校舎の建設工事がほとんど終わったころに出されたものです。

ここからいくつかわかることがあります。「モザイクについて」という今井兼次の原稿が載っていて、「南壁のモザイクはワーズワースの詩の形象化であって、その一節にある『苔むした岩間の堇の花』を基調として、これに星を対応させ詩的に交錯した二本の線でこれを結ぶという考えに基づいています」と書かれています。これで、南壁（実際は西壁は岩間がくれの堇花ということがわかります）。

また、「南側の東端壁のモザイクは、樹根を大地に力強く張り、さらに蒼穹に枝を無限に広げる」などと書かれています。これで、「繁栄の樹」についても判明しました。

「永遠の友情」については、「屋上の南側に二羽の鳥をもって限らない友情を表わし」と書いてあり、おそらくペントハウス南側の壁面であることがわかります。ここに永遠、無限大を表わす記号「∞」があっ

て、その上に鳥が描かれています。実は「二羽友情」と書き込みのあるスケッチが存在しますので、天辺の部分に二羽の鳥を描いて友情を表すことがわかります。

「思い出の四季」と「芽生えから開花」ですが、「屋上の北側は芽生え、つまり成長の喜び、四季の表現の中に求めながら考案しました」と書いています。屋上の北側の階段を下から上に行く、やがてずっと茎が伸びて頂上で花が咲くというのがわかります。ですから、これが「芽生えから開花」で、残るひとつが「思い出の四季」であろうと思われます。

このようにして、すべての主題が明らかになりました。

なお、この四季の部分はエスキースを見るとヨットなどを描いているところがあつたのですが、最終的にはもっと抽象的でもっと実物をじつと見なければわからないイメージに変えられています。

今回、こういった展覧会を通して、今まで明らかにならなかった今井兼次の制作背景、作品の主題が明らかになってきました。

展示コーナーでは、資料として写真や冊子なども並べていますが、注目してもらいたいのは、解体されたフェニックス・モザイクの断片と構想段階でのスケッチとを対応させた展示です。

これらを見ると、今井がエスキースで非常に推敲を重ねていることがわかります。綿密なイメージを重ね、陶器がどういう形で張り込まれているのか、そういった肌合いに至るまでがわかるようになっていきます。展示効果としても、最後に鮮やかな展示が広がる視覚効果もあり、なかなかいい形でまとまったのではないかと思います。

ただ、いい形でまとまったというのは展示室の中だけの感想で、どうしても解体前の状態を想像して比べて見ると、所詮断片は断片にすぎない。もちろん、写真パネルでは紹介できない生々しさや実物しか持ち得ない力というものはあります。しかし本来は断片ではなくて、現地に完全な状態で残っているものが望ましいし、いちばんいいわけです。今回、実物を展示してみても、そこが非常に矛盾を感じた点でもあります。

「建築展」の矛盾と課題

●《三井高陽邸》

この矛盾をよく表わしているのは《三井高陽邸》の展示です。講談社の第一別館として長らく使われていた建物です。棟札に昭和十一年五月に上棟とあったので、おそらく昭和十二年ごろの竣工と考えられますが、解体にあたって行われた調査で、あらためてこの建物がすごいものだということがわかったのです。

非常に内部意匠に凝っていて、特に印象的なのがステンドグラスです。おそらく、当時ステンドグラスのデザイナーとして非常に有名であった三崎彌三郎の作品と想われませんが、植物などをモチーフとして用い、極めてシャープなデザインにまとめ上げられています。

展示したステンドグラスのうち一点は、シャワー室にあったもので、長らく窓に取り付けられたクーラーに隠されており、解体される直前になって発見されました。建物を解体しなければ見つけられなかったというのは皮肉なものです。

何とかこれを展示室内できれいに再現し

たいと思ったのですが、建物にあったときと比べると違和感は禁じえない。

●《佐佐木信綱邸萬葉蔵》

次は旧佐佐木信綱邸の《萬葉蔵》です。佐佐木信綱は歌人あるいは国文学の研究者として知られる人物です。展示品は多くはありませんが、このなかで、建築の構造に興味をもつ方には、外壁のブロックの破片に非常に関心を持つ方がいます。建物の構造は中村式鉄筋コンクリートブロック構造という独特な工法を使っています。設計者が中村鎮(なかむら・まもる)という人で、そこから通称鎮(チン)ブロックと呼ばれています。

最初、私は単純にL字形のブロックを積み重ねて組み合わせることのできた空洞に鉄筋を通し、そこにコンクリートを流し込んで構造壁を構築し外側にボーダータイルを化粧材として貼り付けているのだろうと思っていました。しかし、運ばれてきた外壁の断片を見ると、どうやら違うことがわかってきました。まず先に申し上げたL字形ブロックで最初に壁を構築し、これを中空壁としている。ただの化粧材と

思われたボーダータイルもL字形になっていて、これを積んでいくことにより、さらにその間に鉄筋を通してしているようなのです。

普通、ブロック造は簡便に造れるメリットがあるのですが、ここまでいくと複雑すぎて、おそらくつくるのにも手間がかかっただろうと思います。展示した断片だけでも四七・五三キログラムあり、非常に重く頑丈につくられています。

建物を調査した伝統技法研究会の伊郷さんたちの協力とご教示もあり、鎮ブロックの仕組みがわかったのはいいのですが、これは解体されなければわからなかったし、建物を残せずに展示でしかそういう成果を示すことができなかったというのは、非常に残念でもあります。

●課題

ここから導き出される課題の一つは、実物の展示を重視した結果、展示対象が、関連資料が豊富に存在する事例に偏向してしまっていることです。先ほど紹介した東洋学園大学のフェニックス・モザイクにしても、もし資料がなければ取り上げること

はできなかつたかもしれないのです。

もう一つの課題は、ステンドグラスを剥ぎ取ってみたり、ブロックを壊れた所から持ってきたりと、解体された建物を取り上げたほうが充実した資料展示になるということです。これがパラドックスというか、非常に皮肉な矛盾を抱えた部分だろうと思います。

見た目にしても、本や図面が並んでいるところよりステンドグラスなどが並んでいるほうが説得力があるように思います。ただ、本当は、建物というのは現地にあるからいいのであって、展示会場に解体部材があることは、果たしてどうなのか。

さらに資料収蔵の面では、先ほどの《曙

ハウス》の看板などがそうですが、大型の解体部材を保管することは、収蔵スペースの面で非常に困難になっています。今回、こういった展覧会があったのでどうにか収蔵できたのですが、今後はこうしたことも難しくなってくると考えています。

また公開や活用できる機会がなかなかないというのも問題です。例えば今回の展覧会でも取り上げた秋家住宅という大正時代住宅があります。当館ではストープは常設展示していますが、ドアなどの部分部材についてはしまわれたままでした。それがやつと日の目を見たということですから、なかなか活用する機会が少ない。しかし、いろいろな問題を抱えながらも、そういう

た問題と向き合いながら、さらに実践を重ねることで、どうにかこれらの課題に取り組み、少しでもいい展示を行っていきたいと思います。

今回は可能性についてよりも、課題を提示するに留まってしまいました。これで私の発表を終わらせていただきます。

きただ・けんじ

一九七四年東京生まれ。二〇〇〇年、武蔵大学大学院人文科学研究科博士前期課程修了。世田谷区教育委員会民家園係文化財資料調査員、文京ふるさと歴史館専門員を経て、二〇〇九年四月より東洋大学井上円了記念博物館学芸員。

質疑応答

司会(森)——今日は、江戸東京フォーラムによく来てくださいます専門家の方がお二人いらしてます。まずは、東京都立大学名誉教授の石田頼房先生、何かご感想やご意見がありましたらお願いいたします。

石田頼房——北田さんははっきりおっしゃいませんでしたが、川口さんは建築が専門でないとやっておられました。にもかかわらず、こういう企画、展示、研究発表をなさっていることに大変感心いたしました。こういう優れた展示をやり、かつ研究発表をされるに当たって、専門外と言われる建築のことをどうやって勉強をされているのか、あるいはそういう勉強の機会にどのような要望があるのかを聞かせていただきたいと思います。

北田——実は私も専門は日本民俗学ということで、必ずしも建築ではありません。しかし、日本の古民家については、民俗学の一分野として取り組んだことがあります。また、いまの職場に来る前ですが、世田谷

区教育委員会の次大夫堀公園民家園と岡本公園民家園に一年ほど勤務しました。そこでは、東海大学の稲葉先生を中心として、民家の移築・復元が行われています。特に世田谷区には、建築専門員の方がいらっしやいまして、非常に熱心に取り組んでおられます。そこで、まず文化財と建造物の関係について教えていただきました。

そのとき世田谷で一緒に活動した方々が中心になって、現在、伊豆七島の新島で調査をしています。新島には抗火石という、そこでしか採れない非常に貴重な石を使った石造建造物群があります。その建造物についての調査なのですが、この機会に私も建築の勉強をしています。

私自身はそういった個人的なつながりのなかで、勉強をしてきたというのが実質です。武田五一展や今回の展示では、多くの近代建築に関わる人たちと知り合うことができました。今後も文京区で働くにあたり、彼らとさらに関わっていきながら、建物の保存や、近代建築を資料としてどう読み解いていくかについて、取り組んでみたいと思っています。

川口——私も専門は美術で、特に近世の浮

世絵などを研究していました。ふるさと歴史館の学芸員としてそればかりやっているわけにはいかないのですが、やはり建築については構造だとか様式だとか言われると、めっきり弱いのです。どういうところで勉強をしたかというところ、本を読んだり、実物をたくさん見るようにしました。専門の方と一緒に調査をしますので、そのときに教えていただいたり、いろいろな方とお話をする機会を得て、簡単な所から入っていききました。

建築を建築として見ないという言い方は変なのですが、地域資料として、ほかの版画、絵画類、古文書などと同じように捉えています。特に建築だからといって構えてやっていると、菊人形とか、本郷座という展覧会には、菊人形とか、本郷座という劇場の演劇や映画に関わる企画もあり、文京区に関わるあらゆることを対象にしています。自分が面白いと思ったことが皆さんに少しでも伝わればいいなと思います。自分もやっています。自分が感動したものや面白いと思ったものでないと、人様には伝わらないと思います。これからもいろいろ見る機会を増やして目を肥やしていくよう、

勉強を続けていきたいと思えます。

司会——私も全国の博物館に行きますが、ほとんど埋蔵、考古学の方ばかりです。それはそれで大事なのですが、建築や美術の方は本当に少ないのです。勉強をしてオーラウンドになるという手もありでしょうが、建築の専門家も学芸員として採用すべきではないかという声は非常に強くあります。

ではここで、共立女子大学の八木澤先生にも是非一言いただきたいと思えます。

八木澤壯一——私は建築の設計をやっていますが、今日のお話をうかがって、ああ、やっと建築が皆さんにとって見る対象、愛する対象になってきたのだなと思いい、本当に安心しました。ひよっとしたら私の設計したものも、いつかは保存の対象になるのかもしれないと、おぼろ気ながら光が見えたような気がします。さすが文京区ですね。先ほど話に出ましたが、この博物館が教育委員会から、アカデミー推進課に組織変更されたのは、文化振興法と何か関係があるのでしょうか。

司会——機構改革にはいろいろ難しい問題もあります。金出さんは専門家として保

存、修復をやっていらっしやいますが、一言いかがでしょうか。

金出ミチル——博物館に外から先生が来て講演されるというのは、いろいろな所でよく見ることなのですが、地元の方でこれだけ根気強くまちを歩いて、その情報を発信する場所がある、それを継続的にされているということは、本当に文京区というまちの環境なのですね。そのことによって、直接的には保存に影響がないように見えるかもしれませんが、確実に、間接的にみんなの心に訴えて、「ああ、やはりうちも大切にしないで」とか、「みんなでこの建物を使うことによって廃墟にならないように」という気持ちを芽生えさせる、とても大切な仕事をされていると思えます。特にこういう集まりにこれだけのたくさんの方が集まるといっても、その訴えた力が及んだのだと思うのです。とてもとても素晴らしいことをされていると思えます。

司会——ありがとうございます。質問の中にもそれに関連したものがあります。例えば坂本さんから、「近代建築の活動は面白かったのだけれど、将来これらはなくなっていく運命なのでしょうか、木造の限界な

のでしょうか」。瀬川さんから、「建造物の保存そのものにはまったく及ばないということがあったけれども、それはなぜでしょうか。主に財政上の理由でしょうか。税制で特例措置を設けることとか、建物を公共に寄贈すると特典があるとか、法制度を変えることで対処できる可能性があるものなのでしょうか」。私もそのところを聞きたかったのです。もちろん川口さんは文京区民として、区職員としての立場を離れたところで保存運動に関わっていらっしやるのですが、文京区における保存の制度みたいなものが何かあるのでしょうか。

川口——文化財の保存の制度というのは、よくご存じだと思うのですが、指定とか登録が、国レベル、都レベル、区レベルであります。区指定に関して言いますと、いまはまだ近代——明治維新以降、戦前までという括りで、近代建築という言葉を使っているのですが——の範囲での指定は日本女子大学の《成瀬記念講堂》一棟だけなのです。その理由としては、総合的な調査が進んでいないということ、修復や維持管理などに予算がかかることなどがあって、区指定はなかなか進んでいない状況です。

一方、平成九年度に国の登録有形文化財という制度ができました。正確な数は忘れませんが、文京区内で二八棟ぐらいあります。二三区の中ではかなり多いほうです。積極的に進めてくださる方や、所有者の方の熱意などがあって、これだけの棟数が登録されているのです。しかし、この登録制度にも限界があります。自由に活用してよく、外観だけの登録なので、比較的縛りは少ないのですが、その分、税制の優遇も少なく、修理するときの設計監理費の一部と相続税が一部控除になりますが、直接修復費が出るわけではありません。

登録の数に限りはなく、五〇年以上経った建物が対象です。所有者からの申し出による登録申請も可能です。ただ、手厚い保護がなされているわけではないので、制度上の非常に難しい問題がまだあると思います。

もう一つの質問で、そういう建物がなくなってしまうのだろうかということですが、区としての予算もありますし、一役所レベルでは対応できないこともあります。建物が残っていく大切な要素は、所有者の方、周りの方、受入側の熱意です。先ほど

の安田邸の事例は、この三者がびたりと揃った非常に稀有な事例です。周りの熱意があっても《曙ハウス》のように、残念ながら壊されてしまう事例もあります。私たちのような小さな博物館レベルですべてを引き受けるのは非常に難しいことなので、その三者が力を合わせてやっていくことが今後の道筋の一つかなと思います。

司会——もちろん区が、ふるさと歴史館が先頭に立って保存運動を担っていくことは難しいと思うのですが、いま言われたように、相談窓口にはなってくれるのですか。

川口——はい。登録文化財の窓口は文化財保護係なのですが、私どもでも相談に乗ることはできます。博物館としては、そういうものが大事なのだよと伝えていくことが大切だと思っています。

司会——持主が壊してしまうという明確な意思を持っているときは、反対運動になりがちですが、迷っていらっしやる持主とか、どうにか残したいと思っている持主もいるわけで、そういう方の相談に乗っていただけたらと思います。

「文京区内に有形登録建造物は何箇所ありますか」という質問が、加瀬さんから

もきています。実際には国全体ではいま六六〇〇件を超えています。第一号が東京大学安田講堂です。去年登録一〇年のシンポジウムを安田講堂でやりまして、私も参加しました。そのとき河合隼雄長官は、「ごまんとある」ふうに、登録数五万件ぐらいまでは頑張ろうとおっしゃっていました。



「近代建築の近代とは、歴史的にどの時代を指すのか、それ以前の時代または現代との境界をどのように考えられていますか」という市川さんご質問にも、大体答えていただいたと思いますが、何か追加があればお願いします。

北田——今回、戦後を含めたということで、学校で習った近代のイメージとはだいぶ違ったかもしれませんが、私としては、近代は幕末から明治維新以降と考えているわけです。特に建造物の場合ですと、幕末に伝わった西洋建築が明治に擬洋風建築へと展開し、そして戦後のいわゆるモダニズム建築へと至る流れを、一つの近代建築という形で描いてみたいと思つたわけです。

今回の展示では、戦後から高度成長期に差し掛かった時期、昭和三〇年代ぐらいまでを近代として捉えています。その一連の流れのなかで、和風の伝統建築を継承したような建物から、西洋の影響を受けつつ徐々に発展した、堀口捨己のようなモダンデザインの流れが展開していく。そして、清家清の《森博士の家》のように、非常に効率的な建物がつくられていく。その流れを近代として描いております。

司会——市川さんからは、「今回、寺社、教会建築を除外した理由は何かありますか」という質問がありました。湯島聖堂は宗教建築だとは思いますが。

北田——特に理由はありません。お客様からは、取り上げられた一五事例に必然性が感じられないといった批判の声もありました。しかし、資料があるものを探して自然と集まったのがこの一五事例なのです。最初は二〇事例を取り上げようと思つていましたし、そのなかには教会も入っていました。

今後は宗教建築も取り上げていきたいと思つています。特に私が別の学芸員と注目をしているのは、井亀泉という石工の作品です。根津神社の境内などにあります。そういった石工が残した優れた作品なども、今後取り上げて紹介していければと考えています。

司会——瀬川さんからも一つ、「それぞれの建物の建築史上の位置づけや歴史的資料価値の意味をどうやって明らかにしていくのか」という質問です。確かに私も、《曙ハウス》や、根津神社の所にあった内田百間が住んだ家などには非常に愛着があつた

のですが、建築史的に見て、残すべきものであるか、あるいは価値があるか、というのは少し違います。逆に言うと、建築史的価値ばかりが強調されて、文化史的な意味や、史跡としての意味がいまの制度ですすくい取れません。建築史の立場から見ただけではつまらないし、問題もあると思うのですが、そのあたりどうでしょうか。

北田——私自身、最初から民俗学をやっていたということもあると思うのですが、生活という面に特に注目をしています。例えば、今回たまたまフェニックスモザイクのように、美術的に非常に優れているものも取り上げてはいるのですが、どちらかというと、住宅が多かつたと思つています。その点においては確かに建築史の位置づけから外れる秋家のようなものであつても、生活の器として、地域のなかで確実にその建物が存在したというものを、取り上げてみたいと思つています。

もちろん、そういったもののなかに、たまたま堀口捨己の《小出邸》や清家清の《森博士の家》のような、建築史のなかでも非常に重要とされる建造物が含まれていたということもあります。そういったものは

もちろん気にしながら、今回もシナリオを練ってはいませんが、和洋併設型のような、建築史のなかでもそれほど重視されていないものも取り上げたのは、そういった生活の痕跡を少しでも紹介できればと考えたからです。特にそれが出ているのが、『曙ハウス』と『遠藤医院』です。今回紹介した遠藤医院は、実際にその中で使われていた注射器などの道具を紹介することで、地域の人たちに愛された医者姿を甦らせたいと考えました。

司会——専門性で切らないで丸ごとということですね。今日は『曙ハウス』の保存やその収集に携わった方が来ておられるので、解体の過程を見ていて感じられたこと、もしその経験から何かおっしゃりたいことがありましたら一言お話していただきたいと思いますか。

丸井隆人——僕は大阪に住んでいるのですが、実家が谷中にあるものですから、何度も『曙ハウス』は見ていたのです。『曙ハウス』の解体をほぼ毎日のように写真に撮っておられた方が知合いで、その人のインターネットのブログを見ながら、私自身も『曙ハウス』が解体されていく様子を、まるで

リアルタイムかのように見ることになりました。

しかし、インターネットによって、個人が自由に街角の写真などを、ある一つのメディアに乗せることができる状況になったことよって、逆に僕のなかでは本来そこにあつたいい感じの街角が崩れてくることがあるような気がしています。それは北田さんの課題とされているところに似ていると思うのです。

例えば、森まゆみさんの『谷根千』は、地域雑誌の先駆けとして、谷中、根津、千駄木を全国に広めることになったのですが、それまであまり人が来なかつたような所にも平然と人が入って来るようになりました。谷中、根津、千駄木の人はわりと凶たくて、それを平然と受け入れているように僕は感じるのですが、おそらくもつときやしゃなまちもあると思います。昔の雑誌メディアでは取り上げられなかつたようなところがインターネットで取り上げられるようになって、ちよつと怖いと感じることがあるのです。そのあたりをどう思われているか、今後の企画を考えるうえで、何か念頭に置かれていることはあるのかをお聞

きしたい。

北田——いま言われたことの答えになるかはわかりませんが、陣内秀信先生とお話した時に、先生もそういうまちの雰囲気、街角にやはりこだわっていらつしやいました、展示の中でどう再現できるかといったところは非常に重要であるというご指摘をいただきました。

おそらくその裏返しとして、今回の展覧会が、街角と銘を打ちながら、どうしても建造物単体の、一つひとつの資料であるとかデザインなど、部分にばかり目が行っていたということだと思えます。今回の展示で失敗したなと思えるのは、実はその点です。

もう一つ、そこに関わる人であるとか、そのほかの絵とか外壁とかいう物をひっくりめたまちの雰囲気、なぜ出せなかつたのかを考えてみなければならぬと思います。特に『曙ハウス』については、私たちがもまだまだ解明できなかったところがあつて、この看板なども、単に陳列しただけであの建物が持っている雰囲気、異様な存在感といったものを復元できないかと考えています。答えになつたかどうかわかりませ

んが……。

川口——インターネットが普及し、私たちも勉強の仕方、調べ方が変わってきています。平成一〇年ごろは、ほとんど文献で調査をするしかなかったのですが、いまはインターネットを使って情報収集することが可能になりました（出所や信憑性の問題はありません）。また、個人の方がブログで取り上げることによって、いろいろな方面に認知されて、その大切さが伝わり、広がっていく、熱意がみんなの所へつながっていくという面ではいいと思います。ただ、やはり言われているように、個人の静かな生活や踏み入れているいけない部分などの節度というのは大事だと思います。

しかし今回の《曙ハウス》のように、ただ静かに最後を迎えるのではなく、みんなですごしたというか、まちの中でこういうふうに生きていたんだということを、記録した、みんなが確認したということでは、非常に素晴らしいことだったのでないでしょうか。

司会——先ほどお話に出てきましたので一言付け加えると、『谷根千』は地域に眠って

消えてしまう記憶を記録に変えようということでした。決して観光化のための雑誌でないのは見ていただければわかると思います。一冊読めばみんな歩ける本を頂戴よとよく言われるのですが、そんなの号は一つもなく、継続して読まないとかわからないようにわざと作っています。

路地の特集などをやったときも、場所とかお店の電話番号などもできるだけ載せないようにしました。熱心な探求心のある方だけが到達すればいいと考えているのです。しかし、言葉が一人歩きしてしまつて、「谷根千」という番組がどんどん出てきたり、確かに変わってきています。初期のころは『谷根千』を持って歴史や文化や建築が好きなコアな人が歩いていたのです。最近ではテレビ番組を見て、あそこに行つて一つ博物館が何かを見て、何か美味しい物を食べてブラブラ歩いて、あとお土産を買いたいという方がどっと押し寄せるようになりました。

私たちはそれに対して、本当に何もできないのですが、せめてマナーというか、お寺に入る時には一札をして、お賽銭でも入

れてからとか、勝手にお墓の中に入らないようにしてくださいとか、静かにまちを歩いてくださいということは、ずっと言い続けているのです。しかし一方で、誰も来てくれないということで悩んでいる自治体やまちが多いなかで、これだけ皆さんが来てくれて、好きだとか大事に思ってくれるということ、捨てられないという気もしています。難しいところです。

まだまだ皆さん話したい方もいらつしゃると思いますが、懇親会もごきまつたので、これで終わりにしたいと思います。歩いて見えた方もたくさんいらつしゃるようです。東洋学園大学のモザイクも見られたと思うのですが、北田さんの話を聞いてから見ると、また全然違った経験になると思います。ここから前のどぶ板の跡のある道を直進すれば一分以内におふさの歴史館に到着しますので、どうぞいらしてご覧になってください。

今日は本当に長い時間、どうもありがとうございました。二人の学芸員に再度拍手を。頑張ってください、一緒に頑張ります。頑張りましょう。

1986年

- | | | | |
|-----|------------------------|---------|---------|
| 第1回 | 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供 | 小 木 新 造 | 歴史民俗博物館 |
| 第2回 | 都市下層社会の形成と変容 | 内 田 雄 造 | 東洋大学 |
| 第3回 | やわらかい都市構造 | 陣 内 秀 信 | 法政大学 |
| 第4回 | 考現学の考古学 | 佐 藤 健 二 | 法政大学 |
| 第5回 | 明治期の道路(街区)・路地の幅員基準について | 石 田 頼 房 | 東京都立大学 |

1987年

- | | | | |
|------|-----------------|-----------|---------|
| 第6回 | 博覧会と盛り場の明治 | 吉 見 俊 哉 | 東京大学 |
| 第7回 | 明治期の繁華街の建築 | 初 田 亨 | 工学院大学 |
| 第8回 | 東京の土地・住宅史 | 長谷川徳之輔 | 建設経済研究所 |
| 第9回 | 江戸の構成と構造 | 加 藤 貴 | 北区教育委員会 |
| 第10回 | 水の都・深川成立史 | 吉原健一郎 | 成城大学 |
| 第11回 | 江戸の建築技術 | 西 和 夫 | 神奈川大学 |
| 第12回 | 松浦武四郎の一畳敷の書齋 | ヘンリー・スミス | コロンビア大学 |
| 第13回 | 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京 | 井 上 勲 | 学習院大学 |
| 第14回 | 路上から見た江戸・東京 | 藤 森 照 信 | 東京大学 |
| 第15回 | 東京書物探索入門 | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第16回 | 神田のサウンド・スケープの研究 | 鳥 越 け い 子 | 法政大学 |

1988年

- | | | | |
|------|----------------------------|---------|-----------|
| 第17回 | 絵画史料にみる江戸の町 | 波 多 野 純 | 日本工業大学 |
| 第18回 | 明治期東京の飲料水販売 | 松 平 康 夫 | 東京都公文書館 |
| 第19回 | 江戸城御殿の室内空間について—障壁画下絵による復原— | 西 和 夫 | 神奈川大学 |
| 第20回 | 小江戸・川越のまちとすまい | 内 田 雄 造 | 東洋大学 |
| 第21回 | 現代東京の祝祭 | 松 平 誠 | 立教大学 |
| 第22回 | 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住 | 岡 本 哲 志 | 岡本都市建築研究所 |
| 第23回 | 浅草寺の境内・門前世界 | 竹 内 誠 | 東京学芸大学 |
| 第24回 | 都心定住を考える—市街地の「町」の現代的意味— | 奥 田 道 大 | 立教大学 |
| 第25回 | 都市社会調査の歴史から | 佐 藤 健 二 | 法政大学 |
| 第26回 | 世界都市東京の光と影 | 町 村 敬 志 | 筑波大学 |

1989年

- | | | | |
|------|---|---------|---------|
| 第27回 | 都市の語り出す物語 | 宮 田 登 | 筑波大学 |
| 第28回 | 江戸の都市計画—江戸前島を中心として— | 鈴 木 理 生 | 区立京橋図書館 |
| 第29回 | 江戸の武家屋敷について | 北 原 糸 子 | |
| 第30回 | 江戸の被差別・東京の被差別—もうひとつの江戸・東京— | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第31回 | 江戸東京の遊び—かるたを中心に— | 村 井 省 三 | 村井かるた館 |
| 第32回 | 森鷗外の都市論 | 石 田 頼 房 | 東京都立大学 |
| 第33回 | 東京都心部における空間利用形態 | 山 下 宗 利 | 筑波大学 |
| 第34回 | 「響き」としての東京の街なみ—神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に— | | |

-鳥越けい子 サウンドスケープデザイン
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題.....奥田道大 立教大学

1990年

- 第36回 鶴屋南北の幽霊.....横山泰子 国際基督教大学
 第37回 東京と近代詩.....行吉正一 江戸東京博物館
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる――マンションの老朽化と建て替え問題――
内田雄造 東洋大学
 第39回 東京の地価.....前田尚美 東洋大学
 第40回 江戸の地価.....伊藤好一 関東近代史研究家
 第41回 江戸のごみ処理.....伊藤好一 関東近代史研究家
 第42回 都市農業と土地問題.....石田頼房 東京都立大学
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京.....吉見俊哉 東大新聞研究所
 第44回 江戸の名所・王子.....加藤貴 北区教育委員会
 第45回 上水からみた江戸の都市計画.....波多野純 日本工業大学
 第46回 江戸名所絵における遠近法.....ヘンリー・スミス コロンビア大学

1991年

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗.....丸山伸彦 歴史民俗博物館
 第48回 鋏形蕙斎の江戸一目図屏風.....小澤弘 調布学園女子短大
 第49回 見立絵というもの.....鈴木重三
 第50回 江戸住宅事情.....片倉比佐子 東京都公文書館
 第51回 江戸・明治・大正のすまい.....平井聖 昭和女子大学
 第52回 最近の自治体住宅政策について.....林泰義 計画技術研究所
 第53回 東京市営住宅事業について.....内田青蔵 東工大附属高校
 第54回 東京における水際土地利用の変容―日本橋川と隅田川を中心として―
岡本哲志 岡本都市建築研究所
 第55回 江戸から東京への景観構造変化.....窪田陽一 埼玉大学
 第56回 東京都の都市計画と河川運河.....昌子住江 関東学院大学
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい.....内田雄造 東洋大学

1992年

- 第58回 新宿ヤミ市の復原.....松平誠 立教大学
 第59回 鋏形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる
小澤弘 調布学園女子短大
 第60回 芝居町と観客―都市文化の底流をさぐる―.....小木新造 江戸東京歴史財団
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動.....鈴木栄一 千代田区議員
 第62回 近代演劇人による伝統の発見.....横山泰子 国際基督教大学
 第63回 博覧都市江戸東京.....吉見俊哉 東大新聞研究所
 第64回 読売から新聞まで.....GERALD GROEMER
 第65回 音の風景と近代の忘れもの―大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる―
鳥越けい子 サウンドスケープ機構
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活.....初田亨 工学院大学
 第67回 ヴェネツィアの経済空間―交易・市場・職人―.....陣内秀信 法政大学

第 68 回 都市のまつり 宮 田 登 筑波大学

1993 年

- 第 69 回 江戸、初期の土地問題 吉原健一郎 成城大文学
第 70 回 江戸勤番武士の生活 竹内誠 東京学芸大学
第 71 回 江戸のおんな 杉浦日向子 江戸風俗研究家
第 72 回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合— 加藤仁美 跡見学園短大
第 73 回 新説・日本近代住宅史 藤森照信 東京大学生研
第 74 回 幻の東京オリンピックと万博 磯村英一 東京都立大学
第 75 回 東京市社会局と都市社会調査 佐藤健二 法政大学
第 76 回 近代における東京の都市庶民住居の発展 江面嗣人 文化庁文化財
第 77 回 江戸の町と京都の町 小川保 清水建設(株)技研
第 78 回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる— 伊藤毅 東京大学
第 79 回 谷中墓地をめぐる 森まゆみ 谷根千工房

1994 年

- 第 80 回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地— 八木澤壮一 東京電機大学
第 81 回 葬式のフォークロア 宮田登 筑波大学
第 82 回 東京—極集中と今後の課題—より豊かな都市空間をめざして—
..... 東郷尚武 東京市政調査会
第 83 回 東京都政の 50 年 大串夏身 昭和女子大短大
第 84 回 博物館の住宅展示を考えて—人々は生活史をどうみるか— ジョルダン・サンド
第 85 回 都市空間とセクシュアリティ 上野千鶴子 東京大学
第 86 回 メディアとしての絵はがき 佐藤健二 法政大学
第 87 回 メキシコシティと東京の間で 吉見俊哉 東大社会情報研
第 88 回 北京と東京の比較都市論—歴史的空間構造と近代化のメカニズム—
..... 陣内秀信 法政大学
第 89 回 川越のまちなみの復元 内田雄造 東洋大学
..... 浅井賢治 東洋大学
第 90 回 河鍋暁斎と江戸東京 小木新造 江戸東京歴史財団

1995 年

- 第 91 回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本— 小澤弘 調布学園女子短大
第 92 回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺 丸山伸彦 歴史民俗博物館
第 93 回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料 天野隆子
第 94 回 歌謡曲のなかの東京 大串夏身 昭和女子大短大
第 95 回 江戸の着物文化 田中優子 法政大学
第 96 回 江戸東京学への招待試論 小木新造 江戸東京博物館
第 97 回 「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説— 伊藤毅 東京大学
第 98 回 盛り場考 神崎宣武
第 99 回 近世都市空間の創出過程について—都市構築の基盤材調達の視点から—
..... 北原糸子
第 100 回 江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間— 小木新造 江戸東京博物館
..... 陣内秀信 法政大学

		高階 秀爾	国立西洋美術館
		田中 優子	法政大学
	司 会	内田 雄造	東洋大学
第 101 回	都市の民俗学—色・音・匂の変化—	小林 忠雄	歴史民俗博物館

1996 年

第 102 回	同潤会柳島アパートの生活	大月 敏雄	東京大学
第 103 回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について	佐藤 滋	早稲田大学
第 104 回	住文化の体験の場としての博物館	小澤 紀美子	東京学芸大学
第 105 回	縁切寺—東慶寺と満徳寺—	高木 侃	関東短期大学
第 106 回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小林 克	歴史文化財団
第 107 回	日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の 2 つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—	平井 聖	昭和女子大学
第 108 回	震災復興〈大銀座〉の街並みから	石川 幸恵	清水建設(株)
第 109 回	明治初年の大火と貧富分離論	石田 頼房	工学院大学
第 110 回	戦災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—	越沢 明	長岡造形大学
第 111 回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤岡 洋保	東京工業大学
第 112 回	カフェーと喫茶店	初田 亨	工学院大学

1997 年

第 113 回	橋のアーバン・デザイン	伊東 孝	日本大学
第 114 回	城下町大坂、江戸の都市設計	篠原 修	東京大学
第 115 回	東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—	布施 六郎	東京都
第 116 回	江戸・東京の湯屋	松平 誠	女子栄養大学
第 117 回	江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容—	米田 雅子	
第 118 回	江戸藩邸物語	加藤 貴	
第 119 回	建築家、佐藤功一と都市への視線	米山 勇	江戸東京博物館
第 120 回	明治の歌謡にみる東京	大串 夏身	昭和女子大短大
第 121 回	「江戸名所図会」と長谷川雪旦	鈴木 章生	江戸東京博物館
第 122 回	町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—	波多野 純	日本工業大学
第 123 回	参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—	原 史彦	江戸東京博物館

1998 年

第 124 回	寛永 13 年江戸城外堀普請と周辺地域の変化	榎木 真	新宿歴史博物館
第 125 回	関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて—	藤沢 靖介	部落解放研究所
第 126 回	明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から—	友常 勉	部落解放研究所
第 127 回	関東大震災と朝鮮人虐殺事件	石田 貞	埼玉同和教育協
第 128 回	原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—	柳瀬 有志	法政大学
第 129 回	横浜市の市営住宅事業について	水沼 淑子	関東学院女子短大
第 130 回	目白文化村とその変貌	八木 澤壮一	東京電機大学
第 131 回	地域学の明日を考える	小木 新造	江戸東京博物館

		橋 爪 紳 也	京都精華大学
		結 城 登 美 雄	まちづくりプランナー
		森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰
	司 会	陣 内 秀 信	法政大学
第 132 回	江戸歌舞伎の特色	服 部 幸 雄	日本女子大学

1999 年

第 133 回	東京・明治大正の人口問題	小 木 新 造	江戸東京博物館
第 134 回	江戸東京フォーラムと住総研 伝統的な履歴書	大 坪 昭	住宅総合研究財団墨壺
		吉 田 良 太	住宅総合研究財団
第 135 回	「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—	川 田 順 造	広島市立大学
第 136 回	都市と農村の蜜月時代—近郊農業の展開と流通の変化—	江 波 戸 昭	明治大学
第 137 回	永井荷風と東京	湯 川 説 子	江戸東京博物館
第 138 回	地域雑誌からみた町	立 壁 正 子	『ここは牛込、神楽阪』
		野 口 由 紀 子	『武蔵野から』
		大 野 順 子	町雑誌『千住』
	司 会	森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰

2000 年

第 139 回	「ニュースの誕生」展と江戸東京学	木 下 直 之	東大総合研究博物館
		北 原 糸 子	東大社会情報研究所
		佐 藤 健 二	東京大学
		吉 見 俊 哉	東大社会情報研究所
		富 澤 達 三	神大常民文化研究所
第 140 回	長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」	西 和 夫	神奈川大学
		千 野 香 織	学習院大学
		波 多 野 純	日本工業大学
第 141 回	☆大久保にみる都市の国際化	稲 葉 佳 子	(有)ジオ・プランニング
第 142 回	☆神田多町—震災復興の「まち」から見えるもの—	小 藤 田 正 夫	千代田区まちづく公社
第 143 回	築地・横浜の外国人コミュニティ	森 田 朋 子	お茶の水女子大学
第 144 回	江戸東京フォーラムの果たした役割	太 田 博 太 郎	日本学士院
		小 木 新 造	江戸東京博物館
		陣 内 秀 信	法政大学
第 145 回	遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—	波 多 野 純	日本工業大学
		後 藤 宏 樹	千代田区四番町資料館
		栩 木 真	新宿歴史博物館
	司 会	小 林 克	江戸東京博物館

2001 年

第 146 回	江戸の見世物	川 添 裕	見世物文化研究所
第 147 回	☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み	所 理 喜 夫	足立区立郷土博物館
		荒 居 康 明	町並み研究家
		波 多 野 純	日本工業大学
		大 野 順 子	町雑誌『千住』

- 第 148 回 祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成—神田祭りを主な素材として—
伊藤 裕久 東京理科大学
- 第 149 回 江戸の女性と布橋灌頂会—立山博物館の試み—
鳥越 けい子 聖心女子大学
米原 寛 立山博物館
- 第 150 回 都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—
波多野 純 日本工業大学
初田 亨 工学院大学
大月 敏雄 東京理科大学
森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰
東 孝光 建築家・千葉工大
司 会 陣内 秀信 法政大学

2002 年

- 第 151 回 モダン都市・東京の読書空間—読書装置の 1920～30 年代—
永嶺 重敏 東大資料編纂所
佐藤 健二 東京大学
- 第 152 回 近代皇族邸宅にみる和風と洋風
水沼 淑子 関東学院大学
小沢 朝江 東海大学
- 第 153 回 江戸と怪談と怪異空間
内田 忠賢 お茶の水女子大学
コメンテータ・司会 横山 泰子 法政大学
- 第 154 回 ☆向島の成立と下町気質
佐原 滋元 向島百花園茶亭さはら
- 第 155 回 関一と近代大阪の再創造
ジェフリー・ヘインズ オレゴン大学
コメンテータ 石田 頼房 東京都立大学
" 内田 雄造 東洋大学
通 訳 ビュスト 東京大学

2003 年

- 第 156 回 大江戸八百八町と日本橋界限—『熙代勝覧』の世界—
コメンテータ 波多野 純 日本工業大学
" 森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰
" 竹内 誠 江戸東京博物館
" 市川 寛明 江戸東京博物館
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
- 第 157 回 もう一つの東京の近代住宅史：私論
山口 廣 日本大学
- 第 158 回 江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー— 基調講演 全相 運 韓国科学技術翰林院
コメンテータ 川田 順造 神奈川大学
" 高田 誠二 北海道大学
" 中村 士 国立天文台
" 橋本 毅彦 東京大学
" 波多野 純 日本工業大学
" 渡邊 晶 竹中大工道具館
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
" 鈴木 一義 国立科学博物館
- 第 159 回 ☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」
堀江 亨 日本大学
松山 薫 東北公益文科大学
高橋 幹夫 文化誌研究家

- 第160回 幻燈から映画へ—転換期の映像メディア— 岩本憲児 早稲田大学
 第161回 都市への記憶：「満州国」建築へのまなざし 古賀由起子 コロンビア大学
 コメンテータ 西澤泰彦 名古屋大学

2004年

- 第162回 音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉 秋山宏 日本大学
 第163回 江戸東京に於けるスラムの発生と変容 内田雄造 東洋大学
 コメンテータ 加藤貴 早稲田大学
 第164回 ☆銀座の歴史と都市文化を考える 岡本哲志 岡本都市建築研究所
 第165回 よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—
 基調報告 谷川章雄 早稲田大学
 “ 波多野純 日本工業大学
 事例報告 後藤宏樹 千代田区四番町資料館
 “ 佐藤攻 東京都埋蔵文化財センター
 “ 松尾信裕 大阪市文化財協会
 “ 扇浦正義 長崎県都市整備推進課
 司会 小林克 江戸東京博物館

2005年

- 第166回 江戸の養生所 安藤優一郎 江戸・都市史研究家
 コメンテータ 勝木祐仁 文化女子大学
 第167回 再考—小木新造の江戸東京学— 陣内秀信 法政大学
 パネリスト 波多野純 日本工業大学
 “ 内田雄造 東洋大学
 “ 吉見俊哉 東京大学
 “ 横山泰子 法政大学
 司会 小澤弘 江戸東京博物館
 第168回 ☆水上から江戸東京をみる—一品川の水辺と宿場— 陣内秀信 法政大学
 波多野純 日本工業大学
 第169回 ☆下北沢の魅力—日本型都市再生のあり方を探る— パネリスト 小林正美 明治大学
 “ 大木雄高 ジャズ・バー Lady Jane
 “ 吉見俊哉 東京大学
 司会 陣内秀信 法政大学

2006年

- 第170回 東京エコシティー—新たなる水の都市へ— 岡本哲志 岡本哲志都市建築研究所
 ロドリック・ウィルソン 法大エコ地域デザイン研究所
 石川初 ランドスケープ・アーキテクト
 田島則行 建築家・テレデザイン
 渡辺真理 建築家・法政大学
 久野紀光 建築家・東京工業大学
 パネリスト 猪野忍 建築家・法政大学
 “ 小林博人 建築家・慶応大学
 司会 陣内秀信 法政大学

- 第 171 回 大阪くらしの今昔館—「体感する」博物館活動— 谷 直 樹 住まいのミュージアム
司会・コメンテータ 小 澤 弘 江戸東京博物館
- 第 172 回 日本の町家—京町家と卯建の意味— 大 場 修 京都府立大学
司 会 波 多 野 純 日本工業大学

2007 年

- 第 173 回 ☆杉田玄白と小塚原の仕置場— 野 尻 か お る 荒川ふるさと文化館
コメンテータ 亀 川 泰 照 荒川ふるさと文化館
司 会 土 居 浩 ものづくり大学
司 会 小 林 克 東京都写真美術館
- 第 174 回 ☆地域資料としての『近代建築』— 川 口 明 代 文京ふるさと歴史館
司 会 北 田 建 二 文京ふるさと歴史館
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
- 第 175 回 ^{みやこ みやこ} 都と京—東京と京都の人と暮らし— 酒 井 順 子 『都と京』著者
司 会 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 横 山 泰 子 法政大学
- 第 176 回 巣鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巣鴨地域— 秋 山 伸 一 豊島区立郷土資料館
司 会 成 田 涼 子 豊島区教育委員会
司 会 高 尾 善 希 東京都公文書館
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
司 会 岩 淵 令 治 国立歴史民俗博物館
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団
- 第 177 回 発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性— 谷 田 有 史 たばこと塩の博物館
司 会 毎 田 佳 奈 子 港区教育委員会
司 会 水 本 和 美 四番町歴史民俗資料館
司 会 仲 光 克 顕 中央区教育委員会
司 会 波 多 野 純 日本工業大学
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団

2008 年

- 第 178 回 チャレンジ CG プロジェクト「江戸の町並みをつくる」— 高 橋 時 市 郎 東京電機大学
司 会 勝 村 大 東京電機大学
司 会 小 澤 弘 江戸東京博物館
司 会 波 多 野 純 日本工業大学
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
- 第 179 回 幻の日本万国博覧会—月島の地域学— 増 山 一 成 中央区教育委員会
コメンテータ 伊 東 孝 日本大学
司 会 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 吉 見 俊 哉 東京大学
- 第 180 回 ☆川越のまちづくりと歴史的建造物の活用— 内 田 雄 造 東洋大学
コメンテータ 荒 牧 澄 多 NPO川越蔵の会
コメンテータ 藤 井 美 登 利 川越むかし工房
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
司 会 陣 内 秀 信 法政大学

開催案内

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年4～5回開催しています。
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL = <http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

発刊物など

研究論文・報告

- ①「江戸東京、生活空間の研究」研究所報No.14号/A4判19ページ/住宅総合研究財団/1988
- ②「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7) 研究年報No.18～24/A4判51ページ/
住宅総合研究財団/1992～1998
- ③「『江戸東京』時代の生活と政治」小木新造/A5判92ページ/住宅総合研究財団/2005.8

一般書籍

- ①「江戸東京を読む」A5判295ページ、筑摩書房、1991
- ②「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」B6判290ページ/日本放送出版協会/1995
- ③「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」B6判282ページ/日本放送出版協会/1995
- ④「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」B6判273ページ/日本放送出版協会/1996
- ⑤「江戸東京学」小木新造/A5判225ページ/都市出版/2005

記録小冊子

- ①「地域学の明日を考える」B5判59ページ/住宅総合研究財団/1999
- ②「地域雑誌からみた町」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2000
- ③「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2001
- ④「都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—」B5判44ページ/住宅総合研究財団/2002
- ⑤「江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—」B5判55ページ、カラー/
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班/住宅総合研究財団/国立科学博物館/
東京都江戸東京博物館
- ⑥「よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—」B5判42ページ/住宅総合研究財団/2005
- ⑦「東京エコシティ—新たなる水の都市へ—」B5判46ページ/住宅総合研究財団/2006
- ⑧「都と京—東京と京都の人と暮らし—」B5判40ページ/住宅総合研究財団/2007
- ⑨「地域資料としての『近代建築』」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑩「巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009

住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」の住総研ニューズレターページ

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつけられます。委員は、現在、下記の通りです。主な参加者は、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等に関心ある方で、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京の個性を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市に関心を持つ人たちが、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の基盤を持つこと、このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを考えます。

フォーラムは、企画の基本柱に基づいて立案をしています。その基本柱は、①「記憶」としての都市を考察する、②「地域研究」の掘り下げる、③環境と都市の関係を歴史的視点で考察する、④情報網の構築を江戸明治に学ぶ、の4つです。

21世紀は「都市の時代」です。全世界の人口の大半が都市に住むという、地球規模での都市化が進みつつあります。その反面、環境破壊が今日の大きな問題として浮上しました。都市景観が個性を失い、画一化していることも気になります。

そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究と、その成果の市民への還元に取り組みます。

フォーラム企画委員

委員長

陣内 秀信 法政大学デザイン工学部建築学科

委員(50音順)

小澤 弘 東京都江戸東京博物館

小林 克 財団法人東京都歴史文化財団

波多野 純 日本工業大学工学部建築学科

森まゆみ 作家/地域雑誌『谷中・根津・千駄木』発行人

横山 泰子 法政大学工学部一般教育

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環

地域資料としての『近代建築』

2009年3月20日発行 ©

編集 住総研江戸東京フォーラム委員会

協力 文京ふるさと歴史館

校正+DTP 有限会社 メディア・デザイン研究所

発行人 岡本宏

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel.03-3484-5381 Fax.03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

住宅総合研究財団について

当財団は1948(昭和23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期、これに憂慮した故清水康雄氏(当時清水建設社長)の提唱により、東京都の許可を得て設立された公益法人です。

現在は住生活に貢献しうる研究の委託・助成事業を中心に、住をめぐるシンポジウムやフォーラムの開催、機関誌『すまいろん』の発行等、学問と実践をつなぐ普及活動を行っています。

また、「住」に関する専門図書室を公開しています。蔵書数は書籍が約20,000冊、和雑誌が77誌、洋雑誌が11誌、学位論文が約300冊あります。江戸東京学関係図書は復刻版や古地図も含め、積極的に蒐集しています。